OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植芝盛平論 : 合気道思想の形成と展開
Author(s)	パイエ, 由美子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/50453
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（パイエ黒瀬　由美子）	
論文題名	植芝盛平論 －合気道思想の形成と展開－

論文内容の要旨

合気道の創始者である植芝盛平(以下、植芝と略す)は、天才的武道家としてのみ知られており、植芝と合気道思想についての学術的研究は、極めて少ない。したがって、本研究では植芝が大本の出口王仁三郎（以下、王仁三郎と略す）と出会い、自らの武道を完成していく過程を追い、さらに合気道思想を決定的にした三回にわたる神秘体験を検証し、植芝合気道思想とはどのようなものであるのかを明らかにしている。また、合気道思想の変容の境を合気神社創建の1943（昭和18）年とし、この前後における合気道思想を比較検証し、植芝をこれまで通り武道家としてのみ捉えてよいのか、さらに合気道を一般の現代武道としてのみ捉えてよいのかを問い、植芝と合気道の新たな視座を提示するものである。具体的方法としては、植芝本人、合気道の実践者、また王仁三郎によるテクストを中心に分析、検討を行い合気道思想を明らかにしていく。

合気道は、技法面では大東流柔術や起倒流の影響を受け、思想面は当該期の支配体制側や大本、さらに王仁三郎の活動等が絡み合って複雑な様相を呈している。したがって、合気道思想を明らかにするには、これらの複雑な様相を重層的、通時的な視点において考察する必要があった。

最初に、綾部へ移住した時期から合気道完成までを、綾部の植芝塾時代、東京の皇武館時代、岩間の岩間道場時代に分けて、その各時代について植芝の信仰的側面に目を配りつつ、合気道の創成プロセスとして検討し、これ以降の章の布石とした。

続いて、合気道の源流とされる大東流柔術をめぐる言説について考察を加えた。大東流柔術と武田惣角についてのイメージは、粗野で荒々しいというものであるが、これは合気道側からの発信によって出来上がったものである。この両者のいきさつを見、現在の武道界でおかれているそれぞれの立場を捉え、さらに、植芝がこの源流から何を取り除き自らの理想とする武道を創始したのかを検討した。

次に、合気道思想を解明するにあたって、合気神社建立の前後における合気道の身体観（技法観も含む）、修行観、そしてその修行を行う際の心法という三つの観点について検証することとし、王仁三郎の思想との関連性と共に、合気道思想がどのように構築されていったのかを明らかにした。

合気神社建立以前の特徴的な身体観/技法観として挙げられる点は、自らの肉体は自らのものではなく、神のもの、天皇のもの、という点であった。むやみに傷つけることは避けるべきであるという身体観も見られた。これが、「体の変化」という動きに表わされているのが認められる。また、言霊の働きの捉え方に特徴が見られた。さらに、合気道における力の使い方として、王仁三郎が挙げた八つの力を、合気道の特徴的な力の使い方として説いているのが見られた。このように、植芝の身体観/技法観は、王仁三郎の思想、特に『霊界物語』が背景となっていることが認められた。ただし、身体の捉え方には、合気道家たる所以の王仁三郎との相違が見られた。

修行観の特徴は、霊体一致、神人合一に至るための修行と捉えている点である。また、「霊体一致は天則」とする王仁三郎の思想も背景となっていることが窺えた。このような宇宙観を背景に、「体の変化」と「入り身」という動きが組み合わされ、合気道の理念を現す技法となっている。

心法については、心の先導性、優先性が認められた。この点も『霊界物語』に貫かれている根本的な思想「霊主体従」が背景となっていると考えられる。心法では、自他の境界線を超えた自他の合一、霊体一致した我が他者と合一するという発展が認められた。この時期には未だ「武道の根源は神の愛」という理念は、技法へと昇華されていなかったと考えられる。

合気道思想の解明には、植芝の三回にわたる神秘体験も検証し、植芝の宗教的宇宙観がどのように合気道の理念と技法に顕現されたのかについても検討する必要がある。

第一回目の神秘体験では、合気道の根本的理念である「武道の根源は神の愛」を感得する。第二回目には猿田毘古神とアメノムラクモクキサムハラ竜王大神という二柱の神々と合一し、合気道の禊についての役目を示される。さらに第三回目の神秘体験では、再び猿田毘古神により合気神社を建立せよという神示を受ける。このように第一回目の

神秘体験から体験を経るごとに、合気道の方向性が明確になっている。また、これらの神秘体験の有り様は、他の大本系宗教家等と共通する点が多く、植芝も王仁三郎の志を引き継ぐ宗教家であり、さらに、蒙古での体験からも鎮魂行法家としても捉えることが可能であるということが明らかであった。

では、植芝が神秘体験により感得したことは、どのように具体的な理念や技法として現されたのか。まず、「武道の根源は神の愛」という悟りは、戦わない武道としたこと、また、つねに円い動きをすることにも現れている。合気道の禊の役割は、関節を刺激する技法によって血流を良くし、身体の浄化を計るということに現れている。さらに、それがこの宇宙全体を浄化することにつながり、結局はそれがこの世の立替え立直しにつながると意義づけされている。また、『霊界物語』に「禊の神事」として示されていた「振魂」と「天の鳥船」の動きを取り入れたことにも現されている。

このように、植芝は三回の神秘体験を経て合気神社を建立したことによって、自らの信仰を結実させた。植芝の宗教的宇宙観は、王仁三郎のそれと重なりつつも、神秘体験を経るごとに植芝独自の宇宙観へと発展して、その宇宙観を具体的な形で現すものとして合気神社が建立されたと言える。

次に、合気神社建立以降の合気道思想について見ていくと、神社建立以前の自らの肉体は自らのものではなく、神、または天皇より頂いたもの、という身体観は消失し、これに変わって「魂魄」という言葉を使い、魂と身体の関係性について述べているのが見られた。言霊の宇宙観については、植芝なりの展開がみられ、言霊のイキは、呼吸として世界と、ひいては宇宙と調和する道具として捉えられている。

修行観は、全体として変化しておらず、神社建立前から継承されていると言える。ただし、言葉の使い方で、宇宙との一致、宇宙との同化という言葉を、神人合一と同様の意味で用いているのが見られた。

心法については、もっとも展開させており、特に気に対する捉え方が変化し、この時期に植芝なりの合気道の気のあり方が確立されたと言える。合気神社建立後には、明確に心と肉体と気の存在を分けて、その鍛錬を打ち出しており、気の概念が合気道において重要なファクターとして捉えられている。

また、呼吸については、呼吸という行為そのものが意義付けられ、呼吸によって宇宙の気を吸い込み、宇宙と同化することが説かれている。さらに、呼吸の働きに禊の役割も付加しているのが見られる。以上のような気や呼吸の働きについての捉え方は、王仁三郎の思想には認められなかったものであり、合気神社建立後にもたらされたものであると考えられ、植芝自身の宗教的宇宙観の創造が見られる。

全体としては、王仁三郎の思想、特に神武の思想を踏襲しつつも、自身の神秘体験や合気神社建立を契機に植芝なりの宗教的宇宙観を創造していると考えられる。それが、白光真宏会の五井昌久やその他の新たな宗教家との出会いをもたらし、合気道の理念をさらに展開させているとも言えるであろう。

最後に、植芝亡き後合気道思想は継承されたのか、三名の高弟たちの活動を通して検討し、それによって合気道思想の特徴を再確認した。富木謙治は、1926（大正 15）年に入門後、戦後の財団法人合気会の重鎮となるが、1976（昭和 51）年、自身の流派である昭道館を設立した。富木は、合気道の競技化を推進し、植芝の「戦わない」という根本理念を継承しないことで、合気道を広めようとしたのだった。富木が目指した合気道競技化は、合気道の存在価値を根本的に揺るがすことであると考えられる。つまり、富木の設立した昭道館の存在は、植芝合気道思想の理念を逆説的に明確にするものであると考えられる。

次に、アンドレ・ノケは 1955（昭和 30）年に来日し、1957（昭和 32）年に指導者認定書を授与されている。ノケは外国人として初めての植芝の内弟子として、文字通り肌で合気道思想を吸収したと言える。来日九ヶ月後のインタビューにおいて、武道の根源は神の愛という合気道の理念について言及しており、ノケの理解の深さが現れていると言える。藤平光一は、1940（昭和 15）年入門し、合気会の師範部長まで務めたが、植芝逝去後、合気道とは「天地の氣に合するの道」として独立、心身統一合氣道を創始した。心身統一合氣道は、氣を用いた健康法に近いとも言えるが、植芝の合気道の気についての理念をもっともよく継承していると考えられる。

このように三名は、それぞれが植芝合気道思想の特徴を部分的に継承していると言え、共通点は禊の理念、さらには合気道を手段としたこの世の立直しという目的は継承していないということである。これは、彼らが武道家としてのみ存在する所以であり、彼らが継承しなかった二点は、宗教家としても存在する植芝の特質を現す点であるとも言える。

以上によって、植芝の合気道思想とはどのようなものであるのかを、解明したと考える。

植芝は、大本系の宗教家、鎮魂行法家としても捉えられ、天才的武道家としてのみ見なすことは、植芝盛平という人物の全体像を捉えることではないと考える。さらに、合気道は確かに現代武道であるが、その本質は王仁三郎の志を継いだ、この世の立直しを行う手段であり、行であると捉えることができると言えよう。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ パイエ黒瀬 由美子 ）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	川村　邦光
	副 査	大阪大学　教授	杉原　達
	副 査	大阪大学　准教授	宇野田尚哉

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　植芝盛平論 ― 合気道思想の形成と展開 ―

学位申請者　パイエ黒瀬 由美子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　川村邦光

副査　大阪大学教授　　杉原　達

副査　大阪大学教授　　宇野田尚哉

【論文内容の要旨】

本論文は、合気道の創始者、植芝盛平の個人史を辿り、それに並行して合気道思想、とりわけそこに際立っている宗教思想の形成と展開を探究することを主題としている。

序章では、植芝は弟子によって記された伝記や回想記において、これまで武道家としての側面のみが力説されていたが、神秘体験をもつ宗教家、特に大本の出口王仁三郎(以下、王仁三郎)の影響を受けた宗教家としての側面が無視されてきたことを指摘し、宗教家、植芝の合気道思想を体系的に捉えるとともに、そこに宗教思想を探究することを課題として設定する。

第一章では、植芝の個人史と大本の王仁三郎による影響とを重ね合わせながら、合気道創成のプロセスを、1920 年からの大本・綾部での植芝塾時代、1927 年からの東京の皇武館時代、1942 年からの岩間道場時代の三時代に分けて論じる。

第二章では、植芝・合気道の武術の面で大きな源流となる、武田惣角の大東流柔術に関して論じられる。粗野で荒々しいとする武田惣角・大東流柔術に関する言説やイメージを合気道側は発信してきたが、合気道が一般に認知されるにしたがって、大東流柔術側ではそのような言説やイメージを刷新して、古武道としての言説やイメージを形成していったことを明らかにする。

第三章では、植芝の合気道思想を王仁三郎の宗教思想と関連させて、身体観・技法観、修行観、心法の三観点から考察する。身体観・技法観では、身体を「神の生き宮」とし、合気道の極意とされる「体の変化」という動き、また呼吸と言霊の合致が重視され、それが王仁三郎の『霊界物語』に影響を受けたことを論じている。修行観では修行の目的を霊体一致・神人合一とし、また心法では霊主体従を主眼としているように、王仁三郎の宗教思想を基盤にしている。ただし心法では自他の境界を超えた自他の合一、霊体一致した自他の合一へと発展したことを指摘している。

第四章では、植芝の三度の神秘体験を分析し、大本の鎮魂帰神法を実践した鎮魂行法家であることを明らかにして、三度の神秘体験を経て、合気神社が建立されたことを論じている。武道の根源は「神の愛」とし、丸い動きをする技法を開発し、戦わない武道、また禊による心身の浄化を提唱し、それが王仁三郎の唱える「世の立替え立直し」を実現すると意義づけ

られていることを明らかにしている。

第五章では、1943 年からの合気神社建立後の植芝の合気道思想の展開を論じる。植芝の心法にもっとも変化が見られ、特に気の概念をさらに深化させている。自己の心身と宇宙万物の活動と調和させる鍛練、それに身と心を一つに結ぶ気を宇宙万物の活動と調和させる鍛練の必要を説き、合気道において気の概念が重視されたことを明らかにしている。

終章では、植芝亡き後に、植芝の合気道思想がどのように継承されたのかを、三人の高弟の活動から検討し、「世の立直し」という植芝の合気道思想が継承されなかったと結論する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文では、合気道の創始者・植芝盛平を単なる武道家としての歩みだけではなく、大本の聖師・出口王仁三郎の高弟であった宗教者としての道程を捉えることによって、武道思想と宗教思想からなる合気道思想が明らかになるとする問題設定のもとで、これまで学術的に研究されてこなかった植芝の合気道思想の解明を目指している。この研究を遂行するうえで、申請者が合気道を実践してきたことは、大いに役立っている。

この論文で評価できる点は、植芝が合気道を創始するうえで、大本および王仁三郎の宗教思想と密接に関わっており、植芝の個人史と並行させて、武道思想と宗教思想の形成・展開プロセスを明らかにしたことであり、そこにオリジナリティがある。

植芝がこれまでの禅を中心にして展開されていた武道思想とはまったく異なった、大本・王仁三郎の宗教思想に依拠して、合気道思想を形成し発展させ、武道思想を変革していったことを明らかにしたことは評価できるところであり、武道思想研究に寄与するものである。また、これまでの宗教・新宗教研究の先行研究においては、大本系の鎮魂行法家として、谷口雅春（「生長の家」の教祖）や岡田茂吉（「世界救世教」の教祖）などは取り上げられているが、鎮魂行法家としての植芝はまったく論じられてこなかったことを批判している。そして、これを踏まえて、鎮魂帰神法を実践していた鎮魂行法家・宗教家として植芝を位置づけて、合気道の身体観・技法観、修行観、心法の基盤に王仁三郎の宗教思想が強い影響を及ぼしていたことを詳細に論じ、大本の根本思想である「世の立直し」観を終生堅持していたことを明らかにしている。こうした点は宗教・新宗教研究に寄与するものである。

さらに、三回目の神秘体験後に、植芝は合気神社を建立して、四三柱の神々を祀り、大本・王仁三郎の宗教思想を植芝なりに発展させていったとする指摘は、宗教性をまったく払拭して、国際的な広まりを見せている合気道の現状からすると興味深く、今後の合気道・武道史研究に対して、本論文は重要な問題提起をしていると考えられる。

本論文では、植芝の合気道思想を武道と宗教の二つの思想的側面から深く探究しているといえるが、武道思想の系譜や潮流の中に位置づけることによって、植芝の合気道思想が武道思想を変革していった側面をより鮮明に究明することができたと考える。また、植芝が建立した合気神社に祀られた四三柱の神々は、どのように体系化され、植芝のどのような宗教思想を表わしているのかを解明する必要がある。そこに大本・王仁三郎の宗教思想とは異なった、植芝独自の宗教思想の展開を見ることができると考えられるのである。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。